

平和を祈求する西原町

Nishihara's Commitment to Peace

戦争体験証言集より

本町は、去る沖縄戦で激戦地となり、住民の約半数が尊い人命を失い、また多くの貴重な財産や、歴史的資料が灰燼に帰しました。そのために、町民の反戦平和を願う心はとりわけ強いものがあります。沖縄戦終結から68年を迎えた今日、戦争体験者の減少、戦後世代の増加と相まって、戦争の歴史的教訓が年々風化しつつあります。そのような中で、あの忌まわしい、沖縄戦の悲劇と教訓を忘れず、後世に語り継いでいくことが大切です。

From War Testimony

Nishihara was the site of fierce battles in the Battle of Okinawa. Approximately half of the residents lost their lives and besides this irreplaceable loss, valuable heritage and historical materials were destroyed. For this reason, the townspeople are strongly committed to peace and to preventing war. Today, 68 years after the end of the Battle of Okinawa, the number of people who experienced the war is declining, and as the postwar generations increase, the historical lessons of the war are gradually being forgotten. Therefore it is important to hold onto the memory of the abominable tragedy of the Battle of Okinawa, and to pass it on to posterity.



幸地陣地壕大砲



西原の塔



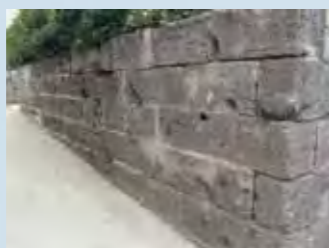
西原町地元住民戦没者刻銘碑



旧西原村役場壕跡



小波津戦没者慰霊碑



字小波津 弾痕のある石塀



西原町発行
戦争体験証言集
平和への証言

より一部を抜粋しました。

私の戦争体験

一九四五年十月中旬の或る夜のことでした。南風原町字津嘉山に在る大きな壕の奥まった所に、七人の日本兵達が、かすかな灯を囲んで世間話や故郷の思い出など雑談に耽つて居ました。突然、「山、山」と呼び掛ける声が入口の暗がりの方から、かすかに聞こえて来ました。「すは、何者」と皆が聞き耳を立て、息をこらして身構えて居ると、なおも「山、山」と声を掛けながら、ゆっくりと奥の方へ入って来る様子でした。こちらから「川、川」と合言葉を返すと、相手は立ち止まった様子でしたので、二人の兵隊が銃を向けながら近づいて行きました。

三十分程経ったであろうか、一人が戻って来て「入って来たのは二人の日本兵であり、彼等の話では、日本は既に八月十五日に米軍に全面降伏し、戦争は終わって居る。生存者は皆収容所に集まっていて、近い内に内地に帰る準備をして居る。それで未だ終戦を知らずに、隠れている兵隊達にそのことを伝えて一緒に帰還しようと、誘いに来たと云って居る。」と報告した。だが誰一人として信じなかった。

「日本が負けるなんて絶対に無い。彼等は敵のスパイに違いない。」「二人をこのまま帰すと、こちらのことがばれて吾々が危ない、射殺しよう。」との結論になりました。その兵隊は、また彼等の方へ出向いて行ったが程なくして戻って来て、「拳銃でやろうとしたが、不発で仕損じた。どうやら奴等に感付かれたらしい。」と、云いました。「それは大変だ、奴等が逃げ出せないように大急ぎで出口を塞いで仕舞おう。」と三人の兵隊達が別の出口から彼等の後に廻り入って来た入口を土の塊などで塞いで出られないようにしたので、それを確認した交渉役の兵隊は、彼等の方へ行き「話は良く分かった、投降することにしよう。」と云い、彼等も「そうか、分かって呉れて有難う、では明朝車で迎えに来る。」と云って二人は、入って来た入口の方へ向かって歩き出した。

結局そのまま口をつぐんだままになって仕舞いました。

(中略)

毎年六月二十三日の慰霊の日には、『平和の礎』の刻銘碑に又十月十四日の命日には、津嘉山の壕跡に花を供え、鎮魂と恒久平和を祈念して居ります。しかしながら、私には、未だ心残りの事があります。一つは犠牲になったもう一人の方の身元確認と、未だに壕内に埋まったままになっている二人の遺体の収容のことです。どれも到底叶えられそうになく、いつも心の中にわだかまっています、それが晴れない限り私の戦後は、終わらないのかも知れません。

先月、摩文仁の平和祈念資料館を再度参観する機会があり、生々しい展示資料に見入り当時の悲惨な情景が改めて思い出され、身の毛もよだつ思いが致しました。その出口近くに次のような、「展示むすびのことば」が、掲げられて居りました。最後にその詩を朗読して、私の話の締めにしたしたいと思います。

宮平 盛彦 (元学徒通信兵)

た。数メートルも行かないうちに、戦場跡で拾い持って居た米軍の自動小銃を、背後からダツダツダツと連射を浴びせました。二人は、出口に向かって走り出したが逃げ路を絶たれました。塞がれた土壁に行き着いて、息絶えしました。その時一人の兵隊は「天皇陛下万歳。」と叫びました。事は終り、誰一人として言葉も無く、唯、茫然と互いに顔を見合せて座り込んで居ました。「天皇陛下万歳を叫んで死んだよ。」「敵のスパイがね。」皆が、怪訝そうな顔をしてささやき合いました。暫くして気を取り直し、死体を人目に付き難い場所に片付けました。事の起りから終りまで、約一時間、或いは、それよりも短かったかも知れません。私は十数メートル奥まった暗がり身を伏せ、じつと息をこらして事の成り行き見守つて居ました。そして、「この事は一切口外しないように。」と、きつく口止めされました。その後は、死んだ二人の捜索や或いは報復があるのではと、不安の日々が続きましたが、特にそう云う事は起こらず、その後はさすがに壕内までは入らず外から「中に誰か居ることは分かって居る、新聞と雑誌を入口に置いてあるので読んで信じて欲しい。故郷では家族が待つて居る、一緒に帰ろう。」と、何度も説得に来ました。

戦後の様子などを報じた新聞や雑誌を見た吾々も、ようやく敗戦の事実を信ずるようになり、とうとう壕を出ることを承知したのは、十二月二十三日頃でした。米軍の車に乗せられて屋敷の収容所へ連行され、初めて「かくも大勢の兵隊達が生き残つて居て、やがて故郷へ帰れること、又終戦になった事が本当であった。」と知った時、今更ながら「吾々はなんと酷い事をしたのだろう、助けに来て呉れた人を殺して仕舞い本当に申し訳ない。」と、自責の念にかられました。収容所に一週間程居りましたが、壕内で起きた事件については、私には何の取調べもありませんでしたので、

沖縄戦の実相にふれるたびに 戦争というものは、これほど残忍で、これほど汚辱にまみれたものはない と思うのです。この生々しい体験の前では、いかなる人でも、戦争を肯定し美化することはできないはずですが、戦争を起すのは、たしかに人間です。しかし、それ以上に戦争を許さない努力のできるのも、私たち人間ではないでしょうか。

戦後このかた 私たちは あらゆる戦争を憎み平和な島を建設せねば と思いつづけてきました。これが、あまりにも大きすぎた代償を払って得た、ゆずることのできない私たちの信条なのです。

平和祈念資料館展示むすびのことば